揺れる鈴の音

ブラスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
揺れる鈴の音

【Ｎコード】
Ｎ４８５８Ｐ

【作者名】
ブラスト

【あらすじ】
超能力。そんなびっくりな事が当たり前になった世の中のお話。
主人公の少女は、このびっくりな世界にいきなり放り込まれることになった。

普通→異質への引っ越し（前書き）

どうも、ブラストです。
これは初のオリジナル小説なので、どうなるか分からないですが、
末永くよろしくお願いします。

普通→異質への引っ越し

トラックががたがたと揺れる音が聞こえる。まだ目的地には着いていないみたいだ。

「早くつかないかな……」

私———鈴宮（すずみや）　初音（はつね）は呟いた。そこ、聞いたことある名前って言わない。私も思ってるから。

話を戻そう。何故、私が今トラック……正確にはトラックの荷台の中に載っているかと言うと、実は、引っ越し中なのだ。

何で引っ越すことになったか。それは二週間前に遡る———

「へぇっ？話？」

「ええ。初音の事よ。」

私は父がいない。なんでか知らないけど。ま、今はかんけーないか。

話を戻そう。

「初音って、確か能力史専攻してたわよね？」

「うん。だって面白いんだもん！」

私にも能力があったらな～、と思った時も。てか今も思っている。

「初音に能力があったら？」

「……はい？」

「ということで、初音！今から引っ越しよ！」

「え、いやちょっと話が見えないよ母さん！」

「初音、能力史に能力持ってる人は何処に行ってるか書いてあるでしょ？」

「いや、そうじゃなくていつ分かったの！？」

「初音が八歳の頃、大泣きしてワイングラスが割れた事件あったでしょ？あの時からあったらしいのよ。」

「時間かかりすぎ！今私十六！」

……とまあ、こんなことがあって、私には能力があるらしく、その能力者達の集まる街に行っている。あ、私の能力は音を操る能力らしい。そこ、聞いたことあるとか言わない。私だってあるわ。おっと、どうやら到着したようだ。

「さーて、降りますかな。」

そう言って降りようとした瞬間、荷台の扉が開かれ、私の視界に入ったのは盗賊装束を着たどうみても盗賊な方々だった。

「……」

「おい嬢ちゃん、悪いことは言わねぇ、その荷物を渡しな。」

「クケケッ、怪我したくなきゃ早く渡し」

「うっさーーーい！！！」

私は大声を出してその音を操り、盗賊な方々を空の彼方まで吹っ飛ばした。……自業自得だよね。

その後、私は荷台から降りて母さんのいる運転席に向かった。

「母さん、大丈夫！？」

「あら、初音。私は大丈夫よ？」

……見ると、盗賊を縄で縛っている母さんがいました……

「母さん……能力者でも無いのによくやるね……」

「あら？私は能力者よ？」

……今なんていいやがりましたこのお方？

「え、母さん能力者？」

「ええ♪因みに、想像したものを創る能力よ♪」

しかもチート級……

「じゃあ、今から行く家って……」

「私の元住居よ。さ、もう少しだから頑張りましょー！」

そう言いながら盗賊を巨大ピコピコハンマーで空の彼方へと吹き飛ばす母さん。……父さん、私、とんでもない人の元に生まれたみたいです。

私はまた荷台に乗り、次止まる時は家であるように、と願った。

「初音ー！着いたわよー！」

「トラック動いて無いよね！？なら先に言ってよ！」

……ほんと、前途不安。

普通→異質への引っ越し（後書き）

作「恒例の後書きトークタイム！」

初「この作品では私がメインなのね。」

作「まあ、まだこっちは始めたばかりだし、ゆっくり更新します。」

初「いつか本腰いれてね。」

作「もちろん。では、また次話で。」

初「これからよろしくお願いします！」

え、もう学校ですか！？（前書き）

初「これまた酷いわねぇ……てかどこまで更新怠惰する気よ！」

作「すいませーん！」

え、もう学校ですか！？

「初音ー！荷解き終わったー？」

「今終わったよ、母さん！」

さて、新たな我が家についてから三十分という驚異的な速さで荷解き、整頓を終えた私は、母さんに呼ばれて階段を下りた。因みに私の部屋は二階。

「母さん、どうしたの？」

「さあ初音。学校に行くわよ！」

……今何ていいやがりましたこの母親？

「母さん、何故今から行かなければならないのか詳しく、詳しく説明して。」

念のため、繰り返して詳しくと言い、聞くと。

「私の親友が今の理事長、そして校長なのよ！説明終わり！さ、行くわよ！」

「ちょ、それ理由になってないいいいいいいいいー！！」

私は拒否権無く、母さんに引きずられながら何処かに向かった。多

分学校なんだろうけど……

「着いたわよー！そして行ってらっしゃい！」

「ちょ、母さん、まってってキャァァァァ！！！」

文字通り引きずられて来た私は母さんの言葉と共に何処かに投げつけられ、ガラス（多分）を割りながら何処かの部屋へと着陸した。

「いっ……たぁ……」

「……大丈夫？いきなりガラスぶち破って入ってきたけど……」

私が頭を押さえていると、上から声が聞こえてきた。多分、校長先生だろう。

「あー……すいません、ここは、国立清廉能力者学校ですか……？」

「ええ、そうよ。……まさか、貴女ここに転入する初音さん？」

「あ、はい。そうです。」

私はまだ痛む頭を押さえながら立ち上がると、髪は黒く長く、とっ

てもスタイルのいい女の人が立っていた。

「貴女が初音さんなのね。初めまして、私がこの学校の校長を勤めている藤咲（ふじさき）　歌麗奈（かれな）よ。」

「歌麗奈先生ですね。初めまして。鈴宮初音と言います。ガラス代は母に払わせますので勘弁してください。」

「……まさかお母さんに投げられてこの八階の校長室まで来たの？」

歌麗奈先生に言われて、側にあった窓から下を見下ろすと、かなりの高さがあって絶句した。

「……信じられませんが、私の母ならしそうなんで信じてください。」

「……貴女のお母さん、人間？」

……あれ？母さん、話は通してあるって言ってたような……

「あの……母さんから話を聞いて……？」

「代理の人から『一人転入させてくれ』って言われただけだから……」

「……すいません、後で母さんをボコボコにしておきます。母さん――鈴宮　凛音から、この学校への転入届を持って来たので、受けとって下さい。」

そう言って届を渡す（投げられる前に渡されていた）と、歌麗奈先生の表情が変わった。

「……凛音？貴女、凛音の娘なの？」

「あ、はい。そうですが……」

「成る程。だから面影があったのね。さて、凛音の娘ならこのクラスでも大丈夫でしょ。」

「え？どういうことですか？」

ポンポンと話を進めていく歌麗奈先生に私はどういうことなのかを聞いた。

「凛音って、清廉能力者学校の首席で、学校内では異名まで付いていたのよ。」

「私が聞いてるのはそれじゃありません！確かにそれ驚きですけど！」

一応突っ込みも入れておく。

「ああ、クラスのこと？いや、このクラスは学年の中でトップクラスの能力と頭を持っている人ばかり集まってるのよ。ま、凛音の娘だし大丈夫でしょ？」

「ちょ、頭はともかく能力知って間もないですよ！？」

「大丈夫大丈夫ー。はい、登録しておいたからねー。」

「どっかで見たことあるぞこの強引さ！」

渡された生徒手帳もどきの機械（手帳が色んな能力付き）を受け取りながら私はこの日一番の声を上げて突っ込んだ。

「失礼しました……」

ガチャリという音と共に、私は校長室を出た。そして、何だか校庭らしき所が騒がしいことに気付いた。

「あぁ、何処かの馬鹿が凜音に挑んだみたいね……」

「ふわぁっ！？歌麗奈先生、いきなりでて来ないで下さい！あとどういうことですかソレ！？」

いきなり出現した歌麗奈先生に驚きながら、私は母さんが何かやらかしたのかと心配になって聞いた。

「ま、ついて来たらわかるわよ。初音さん、ついて来て。」

「あ、はい。」

そういって、私は走る歌麗奈先生の後を追い掛けた。

「ここが大校庭よ。いろんな行事がここで開かれるから覚えておいてね。」

「あ、はい。後……何ですかあの人数……」

私が大校庭に着いたとき、大校庭の真ん中に母さんと一人の男子学生、そしてその回りには沢山の生徒らしき人々が群がっていた。

「さあ？ま、話を聞いていたらわかるんじゃない？」

そういわれたので、私は黙って事を見守る事にした。

「まだ分かっていないのか！？この貴族の中でもエリートの僕が結婚しろと言っているんだぞ！？」

「だから言ってるじゃない。あなたみたいな弱い人には興味が無いって。」

「貴様ァァァ！！」

言い忘れていたけど、ここの能力者学校は色んな国から来ているため、こいつみたいな貴族とかもいる。まあ、この能力者の街に貴族って階級があるのが問題なんだけど。

で、このバカ貴族が母さんに自分の腰に差しているレイピアを抜いて、母さんに突進した。

「はぁ……この学校のレベルはこんなにも下がったのかしら……」

そういって、母さんは何も無い右手に矢を発射する銃……クロスボウガンを出現させた。そして、言い放った。

「歌麗奈ー、肉体的指導って事でいいわよねー？」

居るのをわかっていたのか。そして歌麗奈先生は答えた。

「但し殺さないことー。」

「はーい、りょーかいー。」

次の瞬間、四発の発射音が鳴り、バカ貴族はその場に崩れ落ちた。

「健を打ち抜いたわ。もっと強くなってから言いなさい。」

そう言って、母さんはこちらに歩いてきた。

「ふぇぇ～、怖かったよ初音ぇ～。」

「なにやってんのあんたはぁぁ！！」

とりあえず蹴り飛ばしといた。

え、もう学校ですか！？（後書き）

初「また母さんのキャラが酷くなってる！？」

作「これが普通だっ！」

初「後、作者は久しぶりの更新ですのでいろいろ変わっているかも知れないですが、ご了承下さい。」

作「では、また次話で！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4858p/

揺れる鈴の音

2011年7月27日22時35分発行